とうきょう TOKYO

JA東京グループは、「食と農を基軸として地域に根差した協同組合」として、農業振興と地域振興のためのさまざまな自己改革に取り組んでいる。今回、その実践事例の一部を紹介する。これからも、第32回JA東京大会で掲げた新たなテーマ「東京の農業とJAの未来を拓く」のもと、組合員・地域住民の期待に応えるべく、自己改革に邁進していく。

情報は
最寄りのJAか
JA東京中央会へ

東京都立川市
柴崎町3-5-25
(電)042(528)1372

平成30年11月15日のJA東京大会当日に日本農業新聞で掲載された紙面を一部修正しました。

営農支援、食農教育、加工品開発、買い取り販売、販売新拠点、相続対策

自己改革に邁進

JA東京みなみ

出荷農産物を受け取るJA職員の下田慎平さん

JA東京みなみは、直売所で買い取り方式を導入し、農家所得の増大に貢献している。2017年10月にオープンした農産物直売所「みなみの恵み」では、組合員が出荷する農産物の約8割を買い取り、店頭で販売。委託販売と違い、出荷農産物の引き上げの手間、売れ残りの心配もなく安心して出荷できると農家組合員からも好評を得ている。

JA東京むさし

買い取り委託販売先で農産物の説明をするJA職員㊧と説明を受ける消費者

JA東京むさしは、販売力強化に取り組み、2015年度6億4000万円だった販売高が、17年度は8億1000万円まで増加した。

17年度からJAが生産者から農産物を買い取り、スーパーなどに出荷する買い取り委託販売を強化。売れ残りのリスクをJAが負い、生産者の農業所得向上を図っている。

JA世田谷目黒

農業後継者の質問に答える農家組合員

JA世田谷目黒は、農地の減少を防ぎ、農業をできる環境づくりをするため、特に相続対策の相談に力を入れている。相続相談件数は年々増加し、2016年度の17件から、17年度は26件になるなど、相続相談に対する組合員の関心は高まっている。生産緑地の貸借による体験農園の整備を通じて、農地(緑地)を守ることで地域社会への貢献につなげ、営農経済事業の収支改善を図る。

JA東京島しょ

JA東京島しょは、多様化する花き流通の中で産地として歴史のあるフェニックス・ロベレニーなどの花きの共撰共販を推進している。各部会・各関係機関と協力して品質の向上、安定供給を図るとともに、価格の安定に努めている。

JA東京みらい

新発売した冷凍野菜ギョーザ「ぽてまる」

JA東京みらいは5月、農業者の所得増大を目指し、初めてJA独自の6次産業化商品、冷凍野菜ギョーザ「ぽてまる」の販売を始めた。原材料には、低利用農地と規格外品を有効利用して管内産のジャガイモ、ニンジン、キャベツを使った。価格は8個入り339円。

JA西東京

職員によってより分けられた大豆

JA西東京は、将来の後継者につなぐことを目的に低利用地で大豆を生産している。青梅産大豆を使った豆腐を地元の「豆腐工房ゆう」の協力で製造し、JA直売所で4の付く日に限定販売して好評だ。加工品の生産にも取り組み、今秋、地元業者によって加工したみそ販売を始めるなど、今後も6次産業化を推し進める。

JA東京あおば

地場産農産物を使ったPB商品

JA東京あおばでは、地場産の農産物の知名度向上ならびに消費拡大を目的に、プライベートブランド(PB)商品の開発に取り組んでいる。この3年間で、新たに「江戸東京野菜福神漬」「志村みの早生大根ドレッシング」「練馬キャベツ焼売(しゅーまい)」「練馬大根みそ」を開発した。各農産物販売所で販売PRし、都市農業の魅力を地域住民に発信する。

JAマインズ

園主で営農相談員の戸塚勇さんと栽培指導を受ける利用者

JAマインズは、低利用農地の有効活用と良好な都市環境を形成することを目的に、貸出農園事業を展開している。現在、JA管内3市で4農園を運営し稼働率は82%。JA営農相談員が利用者の営農相談も受けるなど、都市農地の保全と地域住民への農業の大切さを伝えている。同事業を通じてJAは農業者と地域住民の懸け橋となり、地域に「なくてはならないJA」を目指す。

JA町田市

料理教室でケーキを作る子ども

JA町田市は「都市にこそ農を」を合言葉に、准組合員を地域の応援者と捉え、農業に触れ合う場として「地産地消サポーター」制度を始めた。これまでにジャガイモ・サツマイモの収穫体験や、親子料理教室を開いている。会員は350人に増え、今後は直売所で会員に対する割引なども検討し「食べて応援」を実践する。

JAにしたま

収穫体験で農業に触れる子どもたち

JAにしたまは、地域住民を対象とした親子農業体験とサツマイモ収穫体験付き定期積金を募集し、農業への理解醸成に努めている。今年は親子農業体験に44組、定期積金には103件の応募があり、10月13日にサツマイモ掘りを行い、収穫の喜びを味わった。今後も住民へ都市農業を身近に感じてもらえるよう取り組みを強めていく。

JA東京中央

杉並、世田谷両区の学校栄養士との食材検討会

JA東京中央は、学校給食への地元農産物提供に積極的に取り組んでいる。農業者所得増大の販路拡大の一環として、行政と連携して食材提供を増やし、生産者や職員の出前授業による食農教育を通じて都市農業の理解醸成に努めている。学校栄養士との検討会を開き、校長会などにも出席して推進し、今年から杉並、世田谷両区に続き、大田区の小学校にも提供を始めた。

JAあきがわ

農機具を持参した組合員㊧とJA営農支援係の職員

JAあきがわは2016年度から営農支援事業を始めた。農業の作業効率向上、農作業事故の未然防止を目的に、年2回農閑期に農業用機械無料点検を実施。初年度は営農支援センターで開いた。組合員の要望でJA管内各地区で出張点検を行い、現在までに計500台の農機具点検やオイル交換をし、組合員から好評を得ている。

JA東京みどり

肥料を集中購入し、積み下ろしをするJA職員

JA東京みどりは、JA全農東京の生産コスト低減対策を活用し、普通化成肥料の集中購入を行った。良質で低価格な肥料を供給することで、組合員の経費負担の軽減を図る。今後もJAが継続して肥料などの集中購入を行うことで、組合員の生産性向上が見込まれている。

JA八王子

地場産農畜産物の発信、地域貢献に期待がかかる移動直売車

JA八王子は2018年4月から移動直売車「旬菜号」を導入し、毎週市内12カ所で安全・安心で新鮮な地場産農畜産物を販売している。農業者の所得増大に向け、取れたての「八王子産」のおいしさを幅広く消費者に発信する。地域で買い物に不便を感じている人にも喜ばれ、地域貢献としての成果も出ている。

JA東京スマイル

「あだち菜の郷」1周年記念即売会で地場産の野菜をPRするJA職員

JA東京スマイルは2017年、既存の「葛飾元気野菜直売所」に加え、6月に「あだち菜の郷」、7月に「えどちゃんショップ」を新たに開いた。

管内3地区(足立、葛飾、江戸川)に地場農産物供給拠点が完備した。

1周年記念即売会では、多くの人が来場し、地域の期待も高まっている。